

スリランカ・2017年豪雨災害における支援活動について

杉田 依久（若築建設株式会社 国際部部長）

2017年5月26日、サイクロンMoraは南アジアスリランカ国カルタラ州に、日雨量553mmの豪雨を誘発させた。同国では、過去に700mmの豪雨が降った記録は残されているものの、この豪雨による洪水発生でスリランカ全土に渡り5月最終週だけでも208名の死亡、78名の行方不明者を出す大災害となった。6月に入っても、約13,000家屋、600,000人の住人への影響は続いた。この内、2,093家屋が完全倒壊、11,056家屋は半壊したとレポートされている。(写真1)(写真2)

弊社若築建設は、スリランカにおいて1983年より継続的且つ精力的にODAならびに現地政府および民間資金による港湾、道路、橋梁、病院建設等の工事に取り組んできた。日本、スリランカ国交樹立1952年から66年の内、35年にわたり弊社はスリランカで建設事業を行ってきたことになる。皆さんはスリランカが、第二次世界大戦後の日本の国際社会復帰にどれだけの貢献をしてくれたかをご存じであろうか。国交樹立の1年前の1951年、サンフランシスコでの講和会議（講和とは：戦争を終結し、平和を回復するための交戦国間の合意）にセイロン（現スリランカ）より蔵相として参加したJ・R・ジャヤワルダナ氏は「Hatred ceases not by hatred, but by love（憎悪は憎悪によって止むことなく、愛によって止む）」旨の賠償請求放棄の演説を行い、各国の賛同を得た。弊社のここでの35年の歴史は常にスリランカ国民と共にあり、演説の骨子と共にあった。弊社が施工し、2010年に完成した北部マナー州、マナー橋梁（ODA無償工事）には演説の一部を引用させて頂き「愛（まな）の橋」と命名させて頂いた。弊社とスリランカとの深い関係を述べさせて頂いたが、2017年の洪水被害については、上記の様な経緯を含め弊社社長以下たいへんに心を痛めることとなり、僅かではあるが被災した方々へ支援を行うことを決めた。

先ず我々に出来ることは何かを我々はスリランカナショナルスタッフ（150名）と共に話し合った。そして、以下優先順位を設けた。



写真1 水没家屋

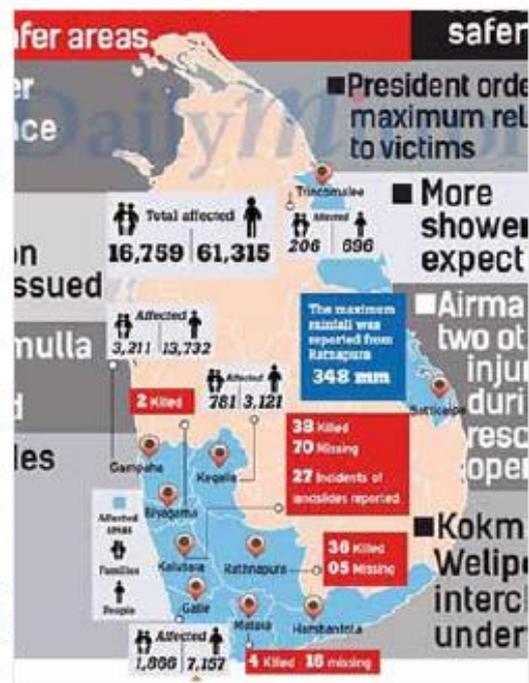


写真2 スリランカ被災地図

1) ナショナルスタッフの救済

雇用スタッフ 150 名の内、16 名のスタッフ及び家族が被災に遭遇していることを踏まえ、これを最優先してすべきこととした。日本人を含め、ナショナルスタッフから集めた寄付金は食料品に代えて 16 家族に届けられた。床上まで泥水に浸かった家屋、破損が生じた家屋に、弊社保有の資材・機材・労務を総動員しての清掃・補修にあたった。(写真 3)



写真3 冠水した主要道路

2) 近隣家屋・家族の救済

各地域の警察署や役場からの、機材提供要請依頼があった。約 1 週間続いた洪水で、道路は寸断され冠水状態となっていたため先ずはボート、そしてボートを運ぶ為の運搬車を提供した。(写真 4)



写真4 ボートでの被災民、物資の運搬

3) 河口処理

各河川を管理する灌漑局より、河川河口に堆積した砂の撤去依頼があった。スリランカ南西地域の河川は、風や波の影響により多くの場合河口が海砂により閉塞されている。降雨による河川水位の上昇はそのまま河川近隣家屋を浸水させる結果に繋がる。今回も大雨が予想された時点で、灌漑局から河口堆積砂撤去の依頼があり、3つの河川について協力を実施した。(写真 5) (写真 6)



写真5 河口の閉塞



写真6 堆積砂撤去後

4) 公共施設の復旧支援

弊社の支援先として病院、学校その他の公共施設が候補としてあげられた。最終的に 2 つの学校のうちからマータラ州の「Dudley スクール」の復旧を支援することを決めた。同校では、スクールの近くを流れる Nilwala 川の氾濫により、

- 三階建校舎の一階部分の浸水、土石流堆積、破損
- 敷地内、校庭への土石流木材流入・堆積
- 図書室の浸水、蔵書・家具の紛失・破損



写真7 冠水した校舎

- 音楽室の浸水、楽器・家具の紛失・破損
- コンピューター室の浸水、コンピューター・家具の破損
- 理科室の浸水、実験用具・家具の紛失・破損等の被害を受けた。

(写真7) (写真8) (写真9)

同校において先ず行わなければならなかったことが、土石流・材木の撤去、水溜まりの撤去、掃除、衛生処理であった。日本でも最近問題視されているデング熱は、特にスリランカでも年中大使館より注意勧告が出されている気を付けなければならない病気である。デング熱を媒体する蚊は、大小の水溜まりから直ぐに発生する為、洪水後の処理には特に気を配らなくてはならないことである。弊社保有の重機、清掃機械や労務者を使い、学校近隣の住民や生徒と共に初期の対応を実施した。次に、破損した家具、蔵書、コンピューター、楽器、実験器具を調査し、何が再使用可能かを検証したが水に浸かってしまった物はほとんどを廃棄処分とせざるを得なかった。

(写真10) (写真11) (写真12)



写真8 校庭の土石流木材被害



写真9 破損した一階部分



写真10 土石流を被ったピアノや楽器



写真11 水没したコンピューター



写真12 泥だらけの蔵書

日本人の識字率 99% に対してスリランカは 91%。彼等彼女等将来のある子供達に教育の機会が戻ってこない、伝統を含め新しい知識を得る為の機会を中断してはならないとの理念の元、コンピューター 21 台や家具を含め出来る限りの無償提供を実施した。また元々一階にあったことが理由で被害に遭った図書室、音楽室、コンピューター室、理科室は二階へ移設することとした。同校の校長によれば、校舍建築後 39 年の間、一度も洪水の被害を受けることは無かったとのこと。また、今回のことで校長、教師、生徒達が学んだことは「また起こるやもしれない。」と言うことだと思ふ。特に地震の無いスリランカでは防災に関する危険意識が非常に低い。2004 年のスマトラ沖地震で、津波をわざわざ見に行った住民が被災にあったとも聞く。「決して忘れない」ことは一つの教訓として Dudley スクールの関係者の記憶に刻まれた。

復旧に 9 ヶ月を要して洪水前より補強された Dudley スクールの引き渡し式典が 2018 年 3 月 2 日に実施された。生徒達がスリランカ国旗、日本国旗を振ってくれている花道を同校プラスバンドを先頭に、日本国大使、スリランカ財務省大臣、校長先生そして弊社社長が続いて会場へ入場した。会場に入りきれない 1500 名以上の生徒・父兄達から感謝の言葉を受けた我々は今後のスリランカ国への寄与と貢献を再度心に誓った。

(写真13) (写真14) (写真15) (写真16) (写真17)



写真13 同校プラスバンド部による元気な先導



写真14 生徒父兄の式参列



写真15 日本国大使、財務省大臣、弊社五百蔵社長による防災の誓い版除幕



写真16 日本国大使のこたば



写真17 改装された新コンピューター室

さて、偶然にも被災地の近くで工事の為に拠点と資材・機材・労務を抱えていた弊社の防災あるいは復興に関する考えを述べさせていただく。

- 地元の緊急要請に瞬時に応えられるネットワークや人間関係を構築しておく。(繋がりを強固に) スリランカ 国省庁—日本大使館—JICA—工事クライアント—警察—近隣役所—近隣住民—コントラクター
- 復興に協力するコントラクターの本来の業務に対する時間と費用の配慮
- 子供達の教育の場を阻害しない努力と手本となる大人の行動
- 何処かのキャッチコピーではないが「まさかはある、またある」。一度、被災を受けた者は皆そう感じている筈である。

我々は、Frontier (国境) のもう一つの意味 (最前線) として、不幸にも災害が起きたときには、これからも俊敏に対応出来ることでここスリランカの1箇所、1村、1施設ずつに復興の足跡を残してゆきたい。それが67年前のJ・R・ジャヤワルダナ氏への返信となる筈だから。(写真18) (写真19)



写真18 鎌倉大仏高徳院にあるジャヤワルダナ元スリランカ大統領碑



写真19 憎悪は憎悪によって止むことなく、愛によって止む

